

用語解説

あ

いよう(囲蛹):ハエやアブの仲間の幼虫は、終齢幼虫が脱皮せずに、その外皮が硬化し、その中で委縮した幼虫が蛹となる。これを囲蛹という。

うじょう(羽状):1枚の葉が鳥の羽のように切れ込むこと。

うじょうふくよう(羽状複葉):小葉が両側に羽のように並び、全体として1枚の葉を形成している葉。

図1【羽状複葉】



おばな(雄花):雄しべのみを持つ花。

か

かいちょう(開張):チョウが翅を広げた時の幅で、左右の翅の端から端までの長さ。本書ではチョウの大きさを表すのに使用している。

がく(萼):花冠(花びら全体)の外側にある部分。(図2参照)

かけい(花莖):タンポポのように、先に花だけをつけ、葉をつけない莖。

かし(下翅):昆虫の翅で後ろまたは下に

あるもの。後翅(こうし・うしろばね)ともいう。

かじょ(花序):花が枝につく並び方。あるいは花をつけた莖または枝。

かすい(花穂):イネ科やカヤツリグサ科などで、小さな花が集まり、穂のようになった花序。

かぶだち(株立):一つの根株から群がり生えている状態。

かへい(花柄):一つひとつの花をつけている柄(え)のこと。

ききなし(聞きなし):「ホーホケキョ(法華経)」などのように、動物の鳴き声を人の言葉の音にあてはめたもの。

きよし(鋸歯):葉の周りの鋸(のこぎり)状の切れ込み。

こうし(後翅):昆虫の翅で後ろにあるもの。甲虫の場合は、下翅(かし)という。

こんせいよう(根生葉):オオバコなど、根に近いところから出ている葉。

さ

しゅういしゅ(雌雄異株):雌花と雄花を別々の株につける植物。

しょうか(小花):キク科の頭状花やイネ科などの密集した花序をつくっている個々の花。

じょうし(上翅):昆虫の翅で前または上にあるもの。前翅(ぜんし・まえばね)ともいう。

しょうじょうふくよう(掌状複葉):複葉の一種で、1か所に複数の葉がつき、手のひら状のもの。

しょうすい(小穂):イネ科およびカヤツ

図2【花のつくり】

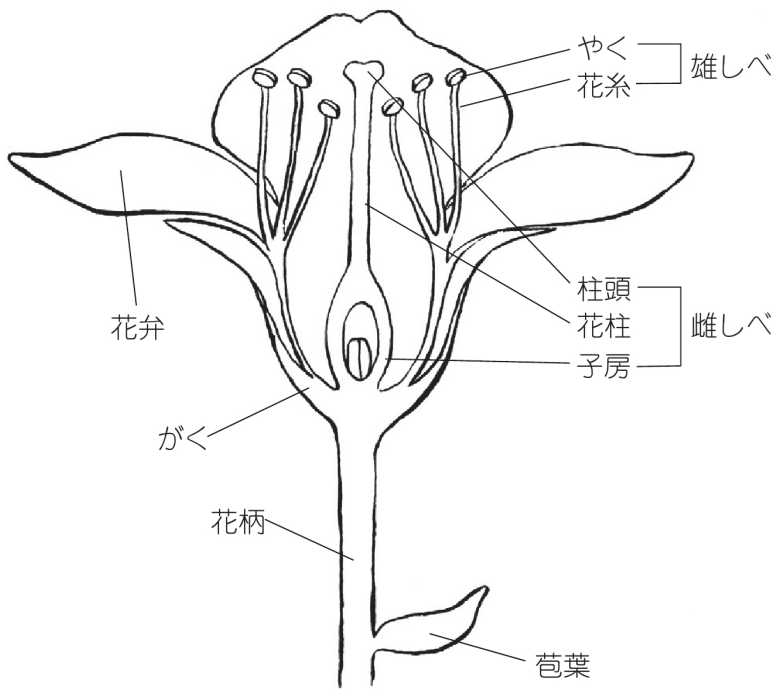


図3【キク科の花の頭花】

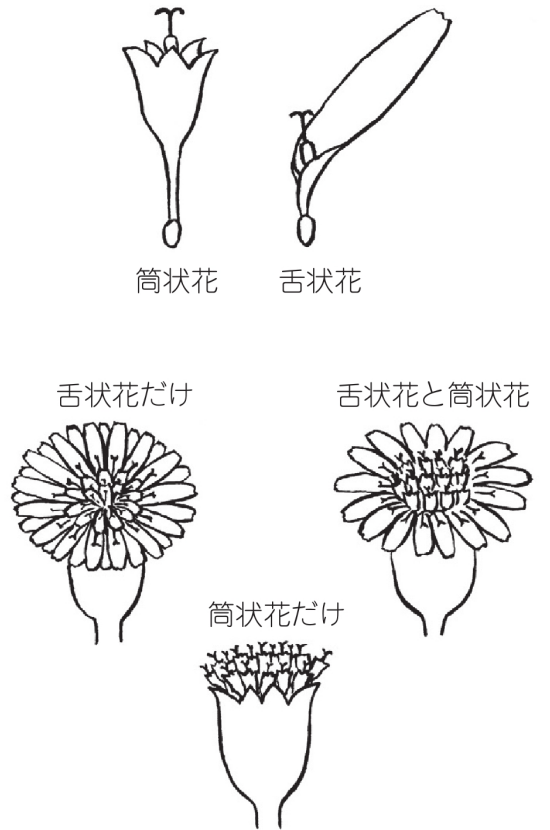


図4【葉のつき方】

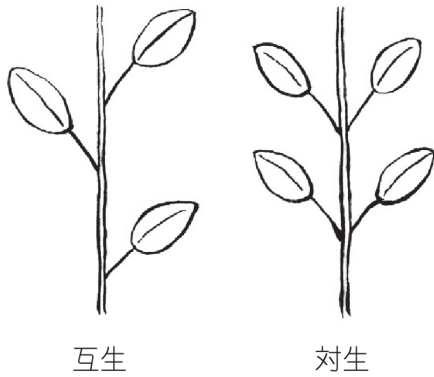
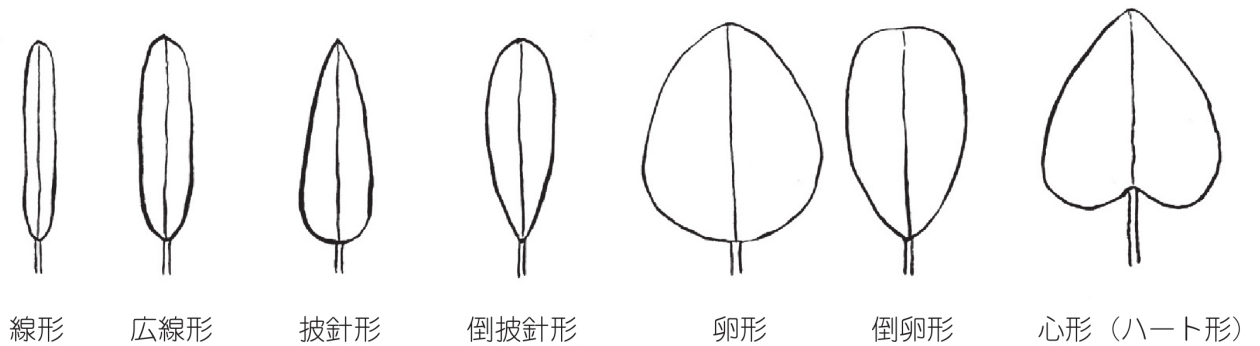


図5【茎への葉のつき方】



図6【葉の形】



*図【羽状複葉】と【花のつくり】は『野草 見分けのポイント図鑑』を参考に作図

リグサ科植物の穂をつくっている単位。

しょうよう (小葉)：複葉についている 1 枚 1 枚の葉のこと。小さい葉のことではない。

しょくそう (食草)：昆虫などの餌となる草や樹木。樹木の場合は食樹ともいうが、本書ではどちらも食草に統一して記述している。

しんけいか (唇形花)：ホトケノザなど、筒状の花の先が、上下の唇のように分かれた形の花。

せいたいけいひがいはうしがいらいしゅ (生態系被害防止外来種)：侵略性が高く、生態系や人体、農林水産業に被害を及ぼす、またはそのおそれのある外来種として環境省および農林水産省が指定した種。特定外来生物など国外由来の外来種のほか、国内由来の外来種も含み、拡散防止・駆除の対象となる。

ぜつじょうか (舌状花)：キク科の頭花をつくる多数の小花のうちで、外側をとり巻く舌のような形をした 1 個 1 個の花。(図 3 参照)

ぜつめつきぐ (絶滅危惧)：絶滅のおそれがある野生生物を、国際自然保護連合 (IUCN) や国・地方自治体でリストアップし、評価カテゴリー別に分類し「レッドデータブック」としてまとめ公表している。本書では、埼玉県の分類に従い、荒川以西地帯での評価に該当する以下の種について解説文に付記した。

【絶滅危惧Ⅰ類】 CR + EN；絶滅の危機に瀕している種

【絶滅危惧Ⅱ類】 VU；絶滅の危機が増大している種

【準絶滅危惧】 NT；生息条件が悪化し、個体数が減少している種

ぜんし (前翅)：昆虫の翅で前にあるもの。甲虫の場合は、上翅(じょうし)という。

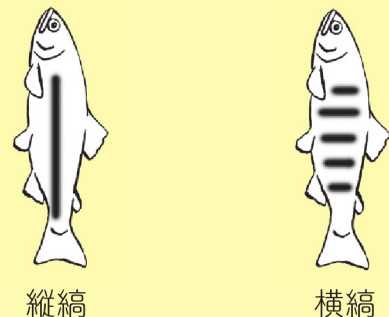
ぜんしちょう (前翅長)：昆虫の成虫の前翅の長さで、本書ではガの大きさを表すのに使用している。

そうほう (総苞)：キク科植物の頭状花などに見られる苞の一種で、花序全体の基部を包む包葉の集まり。

た

たてじま (縦縞)：魚などの縦縞は、頭を上にして見たときの縞の向きで呼ぶ。

図 7 【縦縞と横縞】



とうか (頭花)：頭状花ともいう。キク科の花のように、花茎の先端が著しく短縮し、そこに多数の小花が集まって、あたかも一つの花のように見える花。

とうじょうか (筒状花)：キク科の頭花をつくる多数の小花のうち、中心部に集まっている細いチューブ状の花。(図 3 参照)

とくていがいらいせいぶつ (特定外来生物)：生態系や人体、農林水産業に悪影響を与える恐れがある国外由来の種。「特定外来生物被害防止法」に基づき環境省が指定し、飼育・栽培・保管・運搬・放流が禁止され、違反した場合は罰則がある。

な

なつどり (夏鳥)：春に南から日本に渡っ

てきて繁殖し、秋に南に渡る鳥。

なつばね（夏羽）：つがいを形成する時期や繁殖期の鳥の羽毛。一般的に鮮やかな色になり、オスの方が目立つ場合が多い。カモ類は冬期につがいを形成するため冬に夏羽となる。

のぎ（芒）：イネ科の植物の花や果実にあるかたくて長い毛状のもの。

は

はいじょうかじょ（杯状花序）：雌しべのみ、あるいは雄しべのみに退化した何個かの花が、包葉の内部に包まれていて、花序全体が一個の花のようにみえる。トウダイグサ科の花の特徴。

ひょうちょう（漂鳥）：国内を季節により移動する鳥。高地など冷涼地で繁殖し、低地で越冬するものなど。

ふかんぜんへんたい（不完全変態）：昆虫の成長過程で、蛹にならず幼虫から成虫に変態するもの。

ふくよう（複葉）：1枚の葉がいくつにも深く切れこんで、多数の葉に分かれたように見えるもの。

ふゆどり（冬鳥）：秋に北から日本に渡ってきて、春に北に帰り繁殖する鳥。

ふゆばね（冬羽）：多くの鳥は繁殖を終えると換羽して地味な羽毛となる。これを夏羽に対して冬羽という。

ほうがこうしん（萌芽更新）：雑木林などで樹木を伐採した後、切株から発芽した芽（萌芽）を新たな幹として育て、林を再生する手法。（図8参照）

ほうよう（苞葉）：葉の変形したもので、花や花序の基部につく。

ま

めばな（雌花）：雌しべのみを持つ花。

や

ようしょう（葉鞘）：葉柄の下部が茎を抱いて鞘（さや）状をなしている部分。イネやオギなどに見られる。

ようへい（葉柄）：葉についている柄。

よこじま（横縞）：魚などの横縞は、頭を上にして見たときの縞の向きで呼ぶ。（図7参照）

ら

りゅうちょう（留鳥）：同じ地域で一年中見られる鳥。

